

(19) 病的で老衰した神（『反キリスト者』の 19）

「北ヨーロッパの強い種族」は、「キリスト教の神」を拒否せず、いまだにその「デカダンスの病的で老衰した産物」との結着がつけられずにいる。彼らには「呪い」がかけられ、「病氣、老齡、矛盾」をその「本能」のなかへ取り込んでいる。二千年近く「ただ一つの新しい神(ein einziger neuer Gott)」も創造されず、「キリスト教の単調な有神論の哀れむべき神」が存続している。「零と概念と矛盾から成る混合された退廃の形成物」のなかに、あらゆる「頹廢の本能」、「魂の臆病と疲弊」が認められる。ⁱ

(20) 仏教の優位点（『反キリスト者』の 20）

仏教とキリスト教はともに「虚無主義的宗教」であり、「頹廢の宗教」である。ただし、両者には以下のような際立った違いがある。ⁱⁱ

① 仏教はキリスト教よりも百倍も「実在的(realistisch)」である。仏教は「客観的かつ冷静に問題設定をする遺産」を「身体」のうちにもっており、何百年と続いた「哲学的運動」の後に現われている。そして、その時「『神』という概念」はすでに処理されていた。

② 仏教は「唯一の本来的積極的宗教」である。仏教は「罪に対する戦い」ということを言わず、「現実(die Wirklichkeit)」の権利を認めて「苦しみに対する戦い」と言う。このことによって仏教は、キリスト教と深く区別され、「道徳概念の自己欺瞞」をすでに背後にしており、「善悪の彼岸」に立っている。

③ 仏教は二つの「生理学的事実」に基づき、それを注視している。それは、「感受性の過度の過敏」と「過度の精神化」である。前者は「洗練された苦痛感受力」として現われ、後者は「概念や論理的手続きにおける余りに長い生活」のなかで「個人本能」は「非個人的なもの」となっている。この二つの「生理学的事実」に基づき、「抑うつ状態」が生じた。これに対して仏陀は「衛生的的(hygienisch)」な処置を取った。すなわち、「戸外生活」、「遍歴生活」、「食事における節制と選択」、「あらゆる酒類に対する用心」、「怒りを起こさせ血を沸かすあらゆる情動に対する用心」、「自分に対しても、他人に対しても気遣いをしない」等である。また、仏陀は「安らぎを与えるか快活にする(erheitern)想念」を要求する。そして、これ以外の習慣を止めさせる手段を発見する。仏陀は「善意」を「健康を促進するもの」と解する。「祈祷」は「禁欲」と同じく排斥される。

④ 「定言命法」も「強制」も僧院集団のうちにはない。また、他の考え方をする者に対する戦いを要求しない。彼の教えは「復讐や嫌悪や怨恨の感情」を何にもまして阻止する。「敵意によって敵意は終わらない」ということは全仏教の復唱句である。というのは、このような「激情」こそ「撰生的主要意図」からすると極めて「不健康」なものだからである。

⑤ 仏陀は「過大な客観性」において現われる「精神的倦怠」と闘う。というのは、その「客観性」は「個的関心の弱化」であり、「重心の喪失」、「利己主義の喪失」だからである。仏陀の教えにおいては「利己主義」は「義務」である。すなわち、「いかにしておまえは苦しみから解放されるか」ということが「全精神的撰生法」を規制し、制限するのである。

(21) 快活な仏教と残酷なキリスト教（『反キリスト者』の 21）

仏教の前提は「極めて温和な気候」と「習俗における大いなる柔和さと寛大さ」である。その運動の中心は上流社会、知識階級である。最高の目標は「快活さ」、「静寂」、「無欲」であり、それらは達成される。仏教は「完全性」を切望する宗教ではなく、「完全性」が常態である宗教である。ⁱⁱⁱ

キリスト教においては「屈服された者や抑圧された者の本能」が前景に現れている。そこに「救い」を求めるのは最下層の階級である。ここでは「退屈しのぎの手段」として「罪の症例報告」や「自己批判」や「良心の審問」が行われる。ここでは「最高のもの」は到達されず、「恩寵」とみなされる。「身体」は軽蔑され、コルドバで公衆浴場が閉鎖されたように「衛生」は「官能性」として拒否される。「キリスト教的」なものは、自分や他者に対する「残酷の感覚」や「考えを異にする者に対する憎悪」、「迫害する意志」である。^{iv}

ⁱ Ibid., 19, S.185

ⁱⁱ Ibid., 20, S.186-187

ⁱⁱⁱ Ibid., 21, S.187-188

^{iv} Ibid., 21, S.188